

スピーチ講座第3回 生きた言葉を届けるための基礎練習

NADE九州支部事務局長・アナウンサー 加地 良光

ディベートにおけるコミュニケーションの目的は、自分たちの主張を、観衆の代表であるジャッジに正確に伝え、理解してもらうことにあります。

立論のように、事前に推敲を重ね、しっかりと準備できるスピーチの場合は、その伝え方、表現方法を工夫することで目的を達することが可能です。

しかし、全国大会で即興ディベートという新たな取り組みが行われましたが、事前に証拠資料などを取り揃えずにディベートをする、スピーチをすることは、大変な作業であることをあたらためて感じさせられました。

言葉は生き物です。ちょっとわき道にそれでも、喋っている方でも始末がつかなくなったり、言葉自身の生命力で、子を産み、孫を産み、兄弟を引っ張り込み、親友を連れてきて、止め処もなく広がっていきます。うっかりすると本道がわからなくなり、なかなか元にもどれなくなったりします。そうなると、限られた時間はあっという間に過ぎてしまうことになります。

今回は、フリートーク練習についてご紹介しながら、ディベートへの応用について考えてみます。

●アナ試験でフリートーク力が問われる

東京のキー局ではまもなく秋ごろからテレビ局の就職試験が始まります。アナウンサーの応募数は、私の局の系列であるテレビ東京では毎年5000名を超えるといいます。(地方局でも数百名のエントリーがあります)

試験は、エントリーシートといわれる自己紹介などを記入した書類や作文による審査、漢字の読み書きなど一般教養や時事問題の筆記試験、試験官との面接試験、ニュースの原稿などを読むアナウンスメント試験、カメラテスト、役員面接へと進んでいきます。

そうしたアナウンサー試験の中で、一番の難関となるのがフリートークの試験です。

与えられたひとつのテーマについて、あるいは1枚の写真を見て、決められた時間内に自由に

話すというものです。

たとえば、列車事故の写真を見せられて、2分間のフリートークをするという形式です。

自分が興味のあるテーマであれば、落ち着いて話すことができますが、あやふやな知識しかないテーマだと、頭が真っ白、しどろもどろとなってしまいます。

●フリートークで話す実力がわかる

このフリートーク試験では、事前にある程度想定して準備ができる作文などでは見えてこない、いろんな面からの受験生の実力が浮かび上がってきます。

まず、きちんと筋の通った話ができているかどうかという構成力がわかります。ただ知っていることを並べても、どこが重要なのか、何を伝えたいのかが聞いている人には伝わりません。つまり、「起承転結」など話しをまとめ上げる力があるかどうかわかります。

つぎに、言葉の選択する力です。適確でわかりやすく、簡潔な表現ができているかどうかということです。やたら難しい言葉を使い、背伸びをして意味もわからず専門用語を振りかざしても相手の共感を得るフリートークにはなりません。

そして、個性をみることができます。大勢の受験生がいるために、なんとか目立たないといけなくて力いっぱい演技をする人が少なくありません。突拍子もない話をして目立とうという人も結構います。しかし、個性とは、選んだ内容、話の展開や発想のユニークがどうかということです。

フリートークは、用意した話でないだけに、緊張感も手伝って、受験生は無防備な状態になってしまいます。そのため、その人の日頃の話し方、言葉遣いが出てしまうだけでなく、その人の考え方、生活の様子までもあぶりだされてしまうものなのです。

●フリートークの練習方法を知る

フリートーク試験対策として、どのようなアドバイスをアナウンサー志望の大学生にしているのか、ポイントを紹介します。

○日常から新聞やテレビなどからニュースをよく見聞きしておく

幅広い知識の網をめぐらすことで、どんな話題でも話の展開ができるように基礎力を作っておくことが大事です。とくに、今話題になっていることはどのようなことなのかというアンテナを立てることが大事です。そして、ひとつひとつの時事問題に、自分はどのような考えを持つのかということを確認するくせをつけるようにしておきます。

○社会問題・時事問題の口慣らしをすること。

マスコミを受験しようという大学生であっても、社会問題について、友だちと日常的に会話することはめったにありません。外国語の学習を考えれば、習いたての言葉は、何度も何度も口に出して、練習をするものです。時事的な言葉も同じです。テレビで見たり、新聞で読んだりした専門用語を、口にすることが大事です。何度も話すことで、自分の言葉として消化できてきます。時事的な問題をあえて、ほかの人との話しのネタにすることで、口慣らしをすることが大事です。

○経験の引き出しの整理しておく

そして、フリートークの成功への最も重要なカギとなるのが自分自身の経験です。環境問題を考えるとき、自分が生まれ育った地域はどんな自然環境だったかを思い出します。教育問題を考えるときには、学校生活での思い出、ご指導頂いた先生を思い浮かべます。食糧安全保障の問題なら、食卓に並んだおかずをイメージします。年金・介護など高齢者問題を考えるなら、祖父母の生活をたずねます。時事問題・社会問題といっても、私たちを取り巻く生活すべてが、いろんな問題を考えるための貴重な材料を提供してくれているのです。

●フリートークの練習をディベートにいかす

今回取り組まれた即興ディベートは、スピーチの力をつける大切さを考える良い取り組みになったと思います。

即興ディベートが、ディベート甲子園のディベートと一番違うことは、証拠資料の提示です。即興ディベートでは、論題を試合直前に与えられて、自分の主張を組み立てます。ひとつの主張をするには、即興といえども理由付けが必要となります。手元に証拠資料がない中で、どうすればよいか？

ひとつの方法が、一般的な常識としての内容を積み上げながら話を展開していくこと。もうひとつ

つが、自分の経験を実例として織り交ぜて、それを一般化していくという方法でしょう。

即興のディベートの決勝戦の論題は、18歳のボランティア義務化の是非でした。さきほどの経験の引き出しから論ずる方法をとれば、学校や地域での掃除に参加したこと、人のために動いたときに気持ちよく感じたこと、なかなかボランティアの機会を自分でみつけることは難しいということ、逆にお手伝いを無理やりさせられたときの気持ち、やらない人がいたときの全体の雰囲気など…自分の経験は、聴衆にこの問題を問いかけ、共感を得る十分な材料となります。

ディベート甲子園の試合の中では、書籍やホームページに書かれている専門家のコメントを証拠資料として使います。有識者の客観的な分析は、議論の中で大切な要素なのですが、ともすると、証拠資料を読みまくり、相手の反論がないと、それを判定に引っ張って下さいというディベートになりがちです。

大会に出てくる学校は、ほぼ同じような情報を持ち、想定される議論をぶつけ合っています。そうした中で、説得力を持ったスピーチでジャッジの微妙な判定をものにするためには、ディベーターのフリートーク力が大事なのではないかと思います。

論題に関する知識を身につけ、専門用語などを徹底的に口慣らしする、そして、あえて証拠資料を用いないで、論題を肯定する立場でのフリートーク、否定する立場でのフリートークを試してみる。自分自身が感じていること、自分自身が経験したこと、そうしたものを大事にしながらフリートークに織り込んでいく。

そうすれば、実際のディベートのときに、ひとつの主張をするために、なぜ証拠資料を引用する必要があるのかを、より深く理解するきっかけになるのではないのでしょうか。

有識者による証拠資料に加え、脳内図書館の証拠資料も持ち出すことは、なによりも、自信を持ち、気持ちの入った、説得力あるスピーチを生み出す力になると思います。

証拠資料が使えない中で、価値比較をするという第2反駁の作業は、究極のフリートークとなります。ディベーター自身の思いのこもった言葉でディベートをまとめあげてほしいと、いつも思っています。